

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究 (4)

—1940年代—

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1、第2、第3号において、それぞれ、19世紀末から1910年代、1920年代、1930年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みをなした。本稿はそのつづきであり、1940年代に海外において発表されかつわたくしがみることできた「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する個々の研究の内容を整理しようとするものである*。

(1) A.H.ジェンキンズ (1948)

まず、ジェンキンズの所論をみることにする。

ジェンキンズは、スミスは『国富論』においてある特定の対象物の効用をあらわすものとしての「使用価値」と、その対象物を交換に供することによって得られる他の諸財貨を獲得する力としての「交換価値」とを区別し、そしてそれらのうちの「交換価値」の考察にむかい、そしてまた、その交換価値の考察の一環として、交換価値の真の尺度は何であるか、ということの問題にした、とみるのであるが、¹⁾ジェンキンズは、この交換価値

* 研究の発表年度の区分は、本稿にさきだつ諸稿と同様、著書の場合その原版もしくは初版が出版された年度にしたがった。

の尺度に関するスミスの議論についてつぎのような見方を示している、といえよう。

①スミスはまず、人の貧富はその人がどの程度、人間生活の必需品、便益品および娯楽品を享受できるかということによるのであるが分業が徹底的に行なわれている文明国では、人が自分の労働で自分に供給できるのはそれらのうちのきわめて小さな部分にすぎないため、人の貧富は、結局のところ、その人が支配あるいは購買しうる労働の量に依存することとなるゆえ、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようと思わない人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しくなるということから、労働がすべての商品の交換価値の真の尺度である、とする。²⁾

②そしてスミスは、あらゆる物の真実価格、すなわち、どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものはそれを獲得するための労苦と骨折りであり、そして、あらゆる物が、それを所有している人にとってまたそれを売りさばいて他のなにかと交換したりしようとする人にとって、真にどれほどの値うちがあるかといえば——換言すれば、その物の真実の「交換価値」(real “value in exchange”)は——、それによって彼自身がはぶくことのできる労苦と骨折り、換言すれば、それによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りであり、そのような人にとってのあらゆる物の価値は、その物がその所有者をして購買または支配することを可能にするところの、労働の量に正確に等しい、とする。³⁾

③このようにスミスは労働がすべての商品の交換価値の真の尺度であるとするのであるが、他方彼は、その価値はふつう、労働の量ではなく、貨幣であらわされる、とする。⁴⁾

④しかしながらスミスはまた、貨幣自体は他の諸商品と同様にその価値において変化するために、それは価値の正確な尺度ではありえないのたしいし、労働はそれ自体の価値において変動しないのであり、労働こそが、唯一の正確な価値尺度であるとともに唯一の普遍的な価値尺度——それに

よって時と場所のいかんを問わず我々がさまざまな商品の価値を比較することのできる唯一の標準——である、とする。⁶⁾

⑤このようにスミスは、唯一の正確で普遍的な尺度は労働であるとするのであるが、価値尺度としての貨幣（金，銀，貴金属）と穀物とを比較した場合には、世紀から世紀にかけては穀物が、年から年にかけては貨幣（金，銀，貴金属）がより良い尺度である、とする。そしてその理由は、世紀から世紀にかけては、等量の穀物は、等量の貨幣（金，銀，貴金属）よりもよりいっそう同一量に近い労働量を支配するであろうし、年から年にかけては、等量の貨幣（金，銀，貴金属）は、等量の穀物よりもよりいっそう同一量に近い労働量を支配するであろうから、ということであった。⁷⁾

⑥またスミスは、初期未開の社会状態では商品の交換価値はその商品の獲得、生産に使用される労働量によって規定されるが、資本が蓄積され土地が占有されている社会状態においてはすべての商品の価格のなかには賃金、利潤、地代が含まれる、とするのであるが、その価格の三つの構成部分の真実価値は、それらの各々が購買もしくは支配しうる労働量によって測定される、としている。⁸⁾

1) A. H. Jenkins, *Adam Smith Today; An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, simplified, shortened and modernized*, (1948) reissued, Kennikat Press, Inc., 1969, p. 48.

2) A. H. Jenkins, *ibid.*, pp. 49-50. なお、ジェンキンズは、『国富論』第1篇第5章の冒頭のパラグラフの末尾に含まれている「それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited.....by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library, 1937——以下、W. N. と略記する——, p. 30. 大河内一男監訳『国富論』〈全3巻〉, 中央公論社, 1976年, <I>——以下、大河内訳<I>と略記する。ただし、本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない。——, 52ページ。) という文章およびそれにつづく諸パラグラフに関して、つぎのような指摘をなしている。それによれば、スミスはそこでは、ただ、財貨の交換は労働の交換であるということ、したがって

また、貨幣の使用および貨幣タームでの価値の表示は便利さという目的のための、一つの有用な人間の考案物にすぎないということを、示そうとしているだけであり、そして、そこで考えられていることは、あなたがある物物を売るときには、あなたは、ほんとうは、あなた自身の過去の労働を売っているのだ、またあなたが購買するときには、あなたは、だれか他の人の過去の労働を購買しているのだ、あなたが購買するものの費用は、あなたがそれと交換するものにあなたが投入した労働であるのだ、といったことであり、そしてこのようなことは、どのような価値の定義あるいは価値の理論とも関係はないのであって、事実スミスはここでは、経済学における厳密な命題というよりもむしろ、哲学的な議論にふけっているのである、とされる。A. H. Jenkins, *ibid.*, p. 50 n. 2.

- 3) A. H. Jenkins, *ibid.*, p. 50. なお、ジェンキンスは、「費用」、「価格」、「価値」という三つの密接に関連する言葉は、またとくに後のほうの二者は、混同されやすいとして、それらの言葉に関して大旨つぎのような説明を付している。それによれば、いまある製造業者が、むかし大いに使用されたある品目に対する市場がいまも存在すると誤って判断したとする。その場合、その製造業者が、労働者と材料の助けをかりて、なんらかの貨幣額で表わされる経費で一つのその品物を生産したとする。これが「費用」である。他方その製造業者は、さらに共通費用と販売費および彼の利潤を考慮に入れてなんらかの貨幣額でその品物を販売することを広告したとする。これが「価格」である。しかしだれもその品物を買おうとしないのであるから、その品物の「価値」(あるいは「交換価値」)はゼロである。「費用」は、貨幣で表わすことができ、借入貨幣に対する利子のようななんらかの他の諸経費とともにある所与の品物あるいは商品を生産するのに要した賃金および地代を、意味する。「価格」あるいは「真実価格」あるいは「自然価格」は、これらの諸費用に、売手がその品物あるいは商品を販売することから期待する利潤を加えた合計であり、それは、ある物物がそれで売られるべきところのものなのである。(価格もまた貨幣のタームで表わされる、したがって、貨幣は、価値をもつけれども、価格をもたないのである。) 他方、「価値」あるいは「交換価値」は、ある物物が実際にそれで売られるであろうところのものなのであり、それは、自然価格に等しいこともあれば、それより高いこともあるいはそれより低いこともある。それは、貨幣の形で、売手が大きな、あるいは正常な、あるいはまた小さな利潤を得るか、あるいは損失をこうむりさえするか、ということを決定するものである。A. H. Jenkins, *ibid.*, p. 49 n. 1.

- 4) A. H. Jenkins, *ibid.*, p. 50. その間の事情についてのスミスの説明を、ジェンキンスは大旨つぎのようなものとして示している。それによれば、二つの異なる労働量のあいだの割合を確定するためには、二つの異なる種類の作業に費やされる時間だけでつねに十分であるというわけではなく、たえ忍ばれる辛さや発揮される創意の

程度の違い等々といった、異種類、異質労働の問題を考慮に入れなければならない。ところが、この問題に対処するものとして「市場のかけひきや交渉による調整」ということをあげることができるが、この問題を正確に克服することは困難であるため、一つの労働量ともう一つの労働量を比較することは非常に困難である。それにくらべれば、ある商品をもう一つの別の商品の一定量と比較することのほうがはるかに容易である。またそれにくらべれば、ある商品を貨幣の一定量と比較するほうがより容易である。このような事情から、すべての商品の交換価値は、一般に、その商品と交換に得られる貨幣量によって評価される。A. H. Jenkins, *ibid.*, pp. 50-51.

- 5) ジェンキンズは、このことについての歴史的事実を引き合いに出してのスミスの説明を再現するのであるが、その内容はつぎのようなものとして示すことができる。すなわち、貨幣の主要な素材である金、銀をとりあげれば、それらのものの価値は、その特定の時期にたまたま知られている諸鉱山の多産性に依存するのであり、豊かな鉱山が発見されるとそれらの金属類を鉱山から市場へもたらすのに費やす労働がいっそう少なくなるため、それらの金属類が市場にもたらされたときにそれらが購買、支配できる労働もいっそう少なくなる、つまり、価値が低下する、というものである。A. H. Jenkins, *ibid.*, pp. 51-52.
- 6) その間の事情に関するスミスの説明のジェンキンズによる要約的な叙述については、A. H. Jenkins, *ibid.*, pp. 52-53 を見よ。なお、ジェンキンズは、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値である、ということができよう。……労働だけが、それ自身の価値がけっして変動することのないために、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である」(W. N., p. 33. 大河内訳<I>57-58ページ。)というスミスの主張に関連して、つぎのような指摘をなしている。それによれば、労働者は生活を営むためにはただ一つの生き方しかもっていないのであって、彼が必要とした欲求するものを交換によって得るために持っているのは、多くの生産的総労働時間だけであり、その意味で、労働は労働者自身にとっては価値において変化しない、だが、労働は、交換におけるその価値において広範に変化するものであり、一人の人間の一時間の労働は、もう一人の人間が同じだけの時間で生産する価値の100分の1も生産しないかもしれない、したがって、「人・時」(man-hour)といったような単位は、貨幣に代わる価値の尺度としては、とても使用されえないのであり、また、ある対象物のなかにある労働の量も、価格あるいは交換価値を定めるためには、用いられえない、とされる。A. H. Jenkins, *ibid.*, p. 52, p. 52 n. 3.

またはジェンキンズは他のところで、労働の一時間はどんな場所においてもまたどんな世紀においても同じ一時間であるが、一時間の労働の生産性は広範にわたって変動するかもしれないしまた事実変動するのであって、スミスの言うようには労

働は唯一の正確で普遍的な尺度たりえないのであり、またたぶん、真に正確で普遍的な尺度といったものは存在しない、ということを描している。A. H. Jenkins, p. 53 n. 4.

- 7) A. H. Jenkins, *ibid.*, p. 53. なお、ジェンキンスは、スミスが世紀から世紀にかけての、あるいは年から年にかけての価値尺度ということを問題にしているのは地代の問題に関してである、とみ、そして、そのような地代の問題は日々の売買——人間生活の通常のまた一般的な取引——の問題よりもはるかに重要性は少ない、とする。そして、ジェンキンスは、スミスは貨幣で表わされた価値はある所与の時と場所では正確なものであるということから、そのような日々の売買といった問題のためには、貨幣で表わされた価値で十分であると考え、また、そのような貨幣で表わされた価値は、遠い場所の間での取引において考慮される必要のある唯一の事柄であるとしている、ととらえつつ、以後、『国富論』第1篇第5章での、貨幣の制度、法律、歴史その他の貨幣に関するスミスの議論を紹介しようとしている。それについては、A. H. Jenkins, *ibid.*, pp. 53-57 を見よ。
- 8) A. H. Jenkins, *ibid.*, pp. 58-61.

(2) H. ミント (1948)

他方、ミントは、価値尺度に関するスミスの議論に関連して、以下のような見方をしている、といえる。

①価値尺度についてのスミスの議論は、国民分配分、社会的産出高、社会の経済的厚生、とくに、それらの(ありうる)変化の測定に関する議論として、とらえることができる。⁹⁾

②スミスは労働を価値の真の尺度とするのであるが、それは、スミスを含む古典派経済学者たちの労働を重視する共通の出発点に拠っている。なおそのさい、スミスは、1平均労働単位を遂行することの不効用は不変でありかつすべての人にとって同一であると仮定している。¹⁰⁾

③スミスは、「初期未開の社会状態」では諸商品の生産に「体化された」労働量によって「価値」を測定しようとするいはそれらの諸商品によって「支配される」労働量によって「価値」を測定しようとする問題ではないが、発達した経済では、「支配される」労働量によって測定されなければならない、¹¹⁾と考えた。¹²⁾

〈補 記〉

①でふれたように、ミントが価値尺度についてのスミスの議論を問題とするとき、そこではもっぱら、国民分配分、社会的産出高、社会の経済的厚生、とくに、それらのありうる変化を測定するための指標についての議論としてとらえるのであるが、以下において、そのようなものとしてのスミスの所論についてのミントの検討を整理しておくこととする。

そのようなものとしての価値尺度についてのスミスの議論に関するミントの検討は、大きく分けて、つぎの三つのものから成っている、といえる。すなわち、(1)スミスの議論における、価値の「体化された労働」尺度から、価値の「支配される労働」尺度への移行に関する問題についてのもの、(2)あらゆるタイプの経済に妥当する尺度としての「支配される労働」という尺度によって測定される「年々の生産物」の「真実価値」とはどのような内容のものであるかということにかかわる問題についてのもの、(3)上記(2)で検討されるスミスの議論を支えている諸仮定に関する問題についてのもの、である。

以下、その各々についてみていくこととする。

〔(1)の問題に関して〕：まず、(1)の問題に関しては、ミントはつぎのような見方を示している。それによれば、スミスは、労働が唯一の稀少生産要素でありしたがってまた労働が国民分配分を受け取る初期未開の社会状態といった特殊な状況においてのみ、「体化された労働」と「支配される労働」とは相互に代替しうる、と考えた。それにたいし、発達した経済においては、「体化された」労働量は、分配分のうちの賃金となる部分の価値を測定することができるだけであり、地代および利潤となる分け前の範囲にまでおよぶ分配分の全価値を測定することはできない、とスミスは信じた。かくして、スミスの議論では、あらゆるタイプの経済に妥当する国民分配分の価値の一般的な尺度は、その国民分配分によって「支配される」労働量であって、その生産に「体化された」労働量ではない、とされる

こととなった。¹³⁾

〔(2)の問題に関して〕：つぎに、(2)の問題に関してミントはつぎのような見方を示している。それによれば、スミスの議論には、一方で㉑「年々の生産物」、社会的産出高、社会的所得を、主観的なタームでとらえるといった考え方（ミントは、これを「主観的所得アプローチ」〈a subjective income approach〉とよんでもよい、としている。）が存在するとともに、他方で㉒財貨の物的な量のタームでとらえるといった考え方（ミントは、これを「物的産出高アプローチ」〈a physical output approach〉とよんでもよい、としている。）が存在し、しかもスミスはそれらの間で動揺している、とされる。¹⁴⁾

なお、ミントによれば、㉑の「主観的所得アプローチ」といった考え方は、スミスのつぎの一節すなわち「あらゆる物の真実価格、すなわち、どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得した人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値うちがあるかといえば、それによって彼自身がはぶくことのできる労苦と骨折りであり、換言すれば、それによって他の人々に課することができる労苦と骨折りである。貨幣または財貨で買われる物は、我々が自分の肉体の労苦によって獲得するものとまったく同じように、労働によって購買されるのである。その貨幣、またはそれらの財貨は、事実、この労働を我々からはぶいてくれる。それらはある一定量の労働の価値を含んでおり、その一定量の労働の価値を我々は、その場合、それと等しい労働量の価値を含んでいるとみなされるものと交換するのである。労働こそは、すべての物にたいして支払われた最初の価格、本来の購買貨幣であった。」(W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉52—53ページ。)という一節によって示唆されている、とされる。すなわちミントによれば、この一節は、スミスが自然との人間の闘争の本質は、労働の物理的な単位の中にあるというよりもむしろ主観的な不効用の支出の中にあるも

のと考えていたということを、示唆しているのであり、そして、支出と収入とは互いに比肩するものであるにちがいないゆえ、この一節は、スミスは客観的な物的産出高という概念とは別個のものとしての、主観的な所得概念に到達することを試みていたのだ、ということ暗に意味している、とされるのである。そしてまた、ミントによれば、スミスが「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値である、ということができよう。健康、体力、精神が普通の状態で、また熟練と技能が通常の程度であれば、彼は、等量の労働に対してはつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一量を犠牲にしなければならない。〔労働の不効用というタームで〕彼が支払う価格は、それと引換えに受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。」(W. N., p. 33. 大河内訳< I > 57ページ。〔 〕内はミント。)と述べて、社会的産出高の「価値」を測定するためのベースを提唱したとき、この考えはいっそう強められるのであった、とされる。¹⁵⁾

他方、⑥の「物的産出高アプローチ」という考え方については、ミントは、つぎのような説明を示している。すなわち、ミントによれば、経済システムの理想的な組織についてのスミスの基本的な考えの主要な部分は、いわば満足の量は物的生産物の量に比例すると想定することによって、分析の物的なレベルにその基礎を置いていたのであり、そしてこのことは、主観的所得アプローチというよりもむしろ物的産出高アプローチを示唆しているのである、とされるのである。そしてまたミントによれば、ここでは「^{リアル}真実の」という用語は、財貨の物的な量に等しいものを表わしているように思えるのであり、またこのような考え方にしたがえば、スミスはたんにつぎのような理由から、すなわち、スミスは、ある所与の貨幣額で表わされる購買力がある程度減価するかもしれないようなときにもある所与の労働量で表わされる購買力は、その労働が生産に向けられるときに産み出すであろう実物財の総計以下には低下しえない、と信じていた、という理由から、労働を「真実価値」の理想的な尺度と考えたように思える、と

されるのであった。¹⁶⁾

〔(3)の問題に関して〕：最後に、(3)の問題に関して、ミントは、社会的産出高および経済的厚生におけるありうる増加の指標としての「支配される」労働量というスミスの考え方は、つぎの諸仮定に基づいているとして、その各々に関連してつぎのような指摘をなしている。

㉔それは、労働供給が完全に弾力的であるということ、および、社会的産出高のうち（「生産的」労働者にたいする）賃金基金のためにとっておかれる部分が大きくなっていくかぎり、年々に支配される労働量は増加していくということ、を仮定している。このことは、スミスはある所与の年度についての社会的産出高の正確な測定ということよりもむしろ、社会的産出高の長期的な趨勢あるいは社会的産出高の「通常価値あるいは平均価値」に、関心を抱いていたということを示唆している。あるいは少なくとも、スミスの議論は、着実に増加しつつある人口のゆえにその経済システムは拡大状態の途上にあるのだ、ということを示唆している（*W. N.*, p. 54. 大河内訳< I >92ページを参照せよ。¹⁷⁾）。

㉕我々の算術例では、計算を、労働者は収穫一定のもとで働くという仮定に基づかせていたのであるが、このことは、事実上、スミスの主張を実際よりも控え目に言っていることになる。すなわち、土地からの収穫逓減の法則に心を奪われていたその後の古典派の経済学者たちとは対照的に、スミスは、人口増加それ自体は技術的不可分性ということを克服することによって労働の平均的な物的産出高を向上させるであろうということ、信じていた。つまり、「労働者の数が多くなればなるほど、彼らはますます仕事のさまざまな種類や小部分に自然に分れる」のであり、そしてこのことが、「より少ない量の労働でより多い量の製品を生産」させる、というのである（*W. N.*, p. 86. 大河内訳< I >147ページ。¹⁸⁾）。

㉖スミスの議論では、ひとたびある一定量の労働が生産に「体化」されれば、それはつねに、経済的厚生という点でそれ自体に等しいものよりも一般にヨリ多くの（あるいは少なくともそれより下まわることのけって

ない)ものを支配しうるところの社会的産出高を、生産しうるのであり、そしてこの余剰生産物は、地代および利潤という形で支払われる取り分に等しいということが、仮定されている。このことは、つぎの三つのことを含意している。(i)まずそれは、たとえもし社会の経済的厚生が満足の量にあるとしても、これらの満足の量は、物的生産物の量におおよそ比例して増加するものとみなされてもよい、ということを含意している。(ii)それは、物的な社会的産出高と社会的所得とのあいだにはかなりの乖離は存在しないということ、少なくとも、生産と消費は同一速度で一致して進行させられるということ、したがってまた、マルサスのグラットは存在しないということ、を含意している。(iii)最後に、それは、労働が「剰余」価値を創るのでありしたがってまた労働は発達した経済では「搾取」されるのであるというマルクスの命題を、含意している。このことは、スミスは彼の時代の興隆しつつあった資本家階級の弁明者であったという一般の社会主義者的な見解(E. Roll, *A History of Economic Thought*, <1st ed., 1938, 2nd ed., 1945, 3rd ed., 1956> Kinokuniya Asian edition, 1975, pp. 149-152. 隅谷三喜男訳『経済学説史』<上, 下><第2版の訳>, 有斐閣, <上><初版1951年>再版第5刷1970年, 190-193ページを参照せよ。)に対する反駁として、指摘するに値する。未開状態から発達した状態への社会の転換についてのスミスの説明を注意深く読めば、それは、マルクスの議論を否定しているというよりもむしろ確証しているようにみえるであろう(『国富論』第1篇第6章)。もしスミスが搾取についての議論を長々と展開しはしなかったとしても、それはたぶん、スミスは社会のさまざまな階級の間への社会の総経済的厚生への分配よりもむしろ、全体としての社会の総経済的厚生の変動に、ヨリ多くの関心を抱いていたからである。あるいは、現代の経済学者ならそう言うであろうように、スミスは「分配厚生経済学」(the distribution welfare economics)よりもむしろ「生産厚生経済学」(the production welfare economics)に関心を抱いていたからである。いずれにせよ、スミスを階級闘争におけるパルチザンと

称するまえに、人はつぎの力強い一筋を思い起こすべきである。「下層の人々の生活条件がこのように改善されたことは、社会にとって利益とみるべきか、それとも不都合とみるべきか。答えは一目瞭然である。さまざまな種類の使用人、労働者、職人は、すべての巨大な政治社会の圧倒的大部分を構成している。この大部分の者の生活条件を改善することが、その全体にとって不都合とみなされるはずはけっしてない。どんな社会も、その成員の圧倒的大部分が貧しくみじめであるとき、その社会が隆盛で幸福であろうはずはけっしてない。」(W. N., pp. 78-79. 大河内訳< I >133-134 ページ。)¹⁹⁾

9) H. Myint, *Theories of Welfare Economics*, (original edition 1948) reprinted, Kelley, 1962 and 1965, pp. 15 ff.

10) ミントによれば、古典派経済学者たちの共通の出発点は、つぎの二つの命題に要約されうる、とされる。すなわち、(i) 経済プロセスの本質は天然資源にたいして人間労働をくわえることにあるのであるから、富 (wealth) の全品目は、無視しうる例外はあるが、労働から生じる。天然資源を完成品に変容させることにおいて、労働はそれらに「価値」を授けるのであり、そしてそれは、経済財を自由財から区別するところの価値の入手ということなのである。したがって労働は価値ならびに富の源泉および尺度とみなされてもよく、そして、社会会計に關係する経済財は、労働の生産物に限られるべきである。(ii) 労働は、価値および経済的厚生、貨幣よりも重要な尺度である。貨幣はたんに、「名目的な」標準、生産および消費の真のあるいは物的なプロセスをおおう「ベール」であるにすぎないのにたいし、労働はこれらのプロセスと密接にまたおのずと結びつけられる。それゆえ、貨幣のタームでの価値は、実物財の量におけるそれに対応する諸変化なしにインフレートされたりデフレートされたりするかもしれないのにたいし、労働のタームでの価値は、そのような歪曲をそれほどにはこうむりやすくないであろう。H. Myint, *ibid.*, p. 15.

11) H. Myint, *ibid.*, p. 16.

12) その間の事情をミントはつぎのように説明している。それによれば、スミスはたとえ少し暗然的にすぎるとしても、「初期未開の社会状態」では諸商品の生産に「体化された」労働量によって「価値」を測定しようと、あるいは、それらの商品によって「支配される」労働量によって測定しようと問題ではないとした。すなわち、そこでは労働が唯一の稀少生産要素であると仮定されていたため、労働は、全社会的産出高をその賃金として受け取ることとなるであろう。したがって、「支

配される」労働量は「体化された」労働量に等しいであろう。というのは、それらはたんに、同一の事柄の相互的な局面にすぎないからである。これにたいし、発達した経済では、資本と土地が稀少な要素となるであろう。したがってまた、それらは、社会的産出高の分け前を要求するであろう。したがってそのときには、「体化された」労働量は、産出高のうち、賃金の形で支払われる部分だけの価値しか測定しないであろう。したがって、賃金だけでなく地代や利潤をも含めた国民分配分の全価値を得るためには、それを、それが所与の賃金率で全体として「支配する」ことのできる総労働量によって測定しなければならないのである。H. Myint, *ibid.*, p. 17.

13) H. Myint, *ibid.*, p. 19.

14) H. Myint, *ibid.*, pp. 19 ff.

15) H. Myint, *ibid.*, pp. 19-20. なお、ミントは、いまみた『国富論』からの二つの引用文のなかに含まれている議論は算術的な例によって説明できるとして、つぎのような説明をなしている。すなわち、ある所与の社会的産出高が現行の価格および賃金水準のもとでは、1,000単位の労働を支配することができる(すなわち、 $\frac{\text{社会的産出高の貨幣価値}}{\text{貨幣賃金率}} = 1,000$)と仮定する。そしていまもし、コンスタントでかつすべての人にとって同一であるところの1平均労働単位を遂行することの不効用が k で測定されうらば、そのときには、社会的産出高を構成している諸商品は、 $k \times 1,000$ に等しいだけの満足量あるいは主観的所得を含んでいることになる、というのである。H. Myint, *ibid.*, p. 20.

16) H. Myint, *ibid.*, p. 20. なお、ミントによれば、以上のような点から、ここでは、ある所与の年度の社会的産出高がたとえば1,000ポンドを支配できるといった事実はたいしたことを意味しないかもしれないが、ある所与の年度の社会的産出高がたとえば1,000単位の労働を支配するという事実は、もしこれらすべての労働単位が「生産的に」使用されるならその社会は次の年に1,000単位の労働の、物的生産物を保証されるであろうということを、意味するのであり、そして、この議論の意義は、発達した経済においては国民分配分によって「支配される」労働量は地代および利潤の形で支払われる分配分の部分の程度だけ、その国民分配分の生産に「体化された」労働量を超過するというスミスの命題(なお、ミントによれば、スミスは暗黙のうちに、社会的産出高によって「支配される」労働量はつねに、たとえその生産に「体化された」労働量よりも多くはないということがあるとしても、少なくともそれを下まわることはないであろうということ仮定していた、とされている。H. Myint, *ibid.*, p. 17.)を想起することによって、正しく理解されるであろう、とされる。そしてミントは、つぎにみるような仮定をもうけつつ、その議論の意義を以下のように説明している。すなわち、いま仮に、1,000単位の労働を支配するその時の社会的産出高は、一般的な財金財 W のタームで1,000単位の

物的産出高からなっており、そしてそのうち 600 W 単位は賃金として支払われ、200 W 単位は地代として 200 W 単位は利潤として支払われる、とする。スミスにしたがえばこのような事態はつぎのことを意味する。(i) 1,000 W 単位のその時の社会的産出高はいま 1,000 単位の労働を支配するのであるけれども、この 1,000 W 単位の社会的産出高は、その生産に「体化された」600単位だけの労働の生産物である、また、(ii) もしその支配される労働の全量が「生産的」目的に使用されたならば、すなわち、もし地代と利潤を構成する 400 W 単位が全部貯蓄されておりそして次年度に生産に再投資あるいは「体化され」たならば、その次年度の社会的産出は、非常に大きく増加させられたことであろう、ということである。すなわち、労働の収穫一定を仮定し、そして、600 単位の労働が 1,000 単位の賃金財を生産しうるならば、そのときには、1,000 単位の労働は、 $\frac{1,000 \times 1,000}{600}$ ほぼ 1,666 W 単位を生産できるのであり、そして、労働の供給が労働 1 単位当り 1 W の賃金で弾力的でありつづけると仮定すれば、そのときには、これは、社会に、1,666 単位の労働に対する支配力を与えるのであり、そしてそれは、その労働量が生産するようさせられうるどころの実物財一般の総計に対する支配力に等しい、ということになるのである。H. Myint, *ibid.*, pp. 20-21.

そして、以上のことから、ミントは、この第二の意味で「支配される」労働量によって測定される社会的産出高の価値とは、その産出高に含まれる主観的な社会的所得の程度ではなく、もし支配される労働のすべてが「生産的」目的のために使用されていたならば次年度に予期されうる物的産出高の最大可能量の程度であり、そして、スミスは、満足の量は物的生産物の量に比例するという彼の大きざっぱな想定と結びつけて、価値尺度についてのこの第二の見解を、頑健な議論として、社会の経済的厚生は貯蓄額の増加によってつねに増加させられうるということを示すために使用した (W. N., p. 54. 大河内訳 <I>92ページ。), とするのである。H. Myint, *ibid.*, p. 21.

なお、ミントによれば、以上のようなものとしてのスミスの「主観的所得アプローチ」という考え方と「物的産出高アプローチ」という考え方のうち、前者のアプローチは、次第に消えうせてしまい、後者のアプローチに取って代わられるようになったとされるのであるが(なお、ミントによれば、それはまた、生産的労働についてのスミスの学説における二重の要素という問題にたいしても重要な光明を投じるものである、とされ、そのことに関して、ミントは、H. Myint, *ibid.*, chap. V, sec. II を参照するよう指示している。H. Myint, *ibid.*, p. 21.), ミントはそれらの各々について、つぎのような検討をなしている。

まず、「主観的所得アプローチ」、主観的な社会的所得の指標としての「支配される労働」という価値尺度といったスミスの考え方についてのミントの所論はつぎのようなものである。それによれば、たとえ、満足の量はある絶対的な意味で測定可

能であり、1標準労働単位を遂行する不効用は一定でかつすべての人々にとって等しいといった基本的な諸仮定を一応容認したとしても、もしある所与の社会的産出高が1,000単位の労働を支配するならばそのときにはその社会的産出高はこれら1,000単位の労働を遂行するさいの総不効用に等しいだけの労働者たちにとっての満足の量あるいは主観的所得を示している、という命題を満足のいかに主張するには諸困難が存在する。これらの困難は、1,000単位の労働を支配する所与の社会的産出高は1,000単位の賃金財 W からなり、そのうち $600W$ 単位は賃金として支払われ、 $200W$ 単位が各々、地代と利潤として支払われるという先の例に立ち帰ることによって知ることができる。すなわち、(a)いま地主と資本家が、彼らの全取り分 $400W$ 単位を、「贅沢な」諸サービスを生産する「不生産的」労働者に提出することによってすべて消費してしまうことを決定する、と仮定しよう。この場合には、主観的所得の尺度としての支配される労働の量は、どのように作用するか。仮定上「生産的」労働者へ賃金として支払われる $600W$ 単位については、それほど問題はない。すなわち、労働1単位当り $1W$ 単位の率では、その賃金総額は600単位の生産的労働を支配するであろう。そして、この600単位の生産的労働は、次年度に $1,000W$ 単位を生産し、そして、その生産的労働者たちは、600単位の労働を遂行する不効用に等しい主観的所得を享受するであろう。だが、「不生産的」労働者に提出される $400W$ 単位についてはどうであろうか。これらの労働者たちもまた400単位の労働を遂行するのに等しい主観的所得を享受するであろう。しかしこれに加えて、地主と資本家もまた、彼らに対してなされる「贅沢な」諸サービスから一定量の主観的所得を受け取るであろう。したがって、我々がここで仮定している条件のもとでは、社会の総主観的所得は、「贅沢な」諸サービスあるいは不生産的消費から得られる所得の量だけ、1,000単位の労働を遂行する不効用に等しいものを、超過しなければならぬということとなる。したがってまた、この場合には、スミスは、「贅沢な」諸サービスを排除することによってのみ、彼の命題を主張することができるということとなり、そしてまたそのような排除は、社会の全体としての所得へのアプローチということに反するものなのである。(b)他方、地主と資本家が、 $400W$ 単位の彼らの全(純)所得を再投資することを決定する、と仮定しよう。この場合には、「贅沢な」諸サービスは生産されないのであるから、主観的な社会的所得は、1,000単位の「生産的」労働を遂行するのに等しいものによって測られてもよいかもしれない。だが、次年度に支配される労働量にはどのようなことがおこるであろうか。収穫一定のもとでは、今年度生産に「体化」される1,000単位の「生産的」労働は、次年度、 $\frac{1,000 \times 1,000}{600}$ ほぼ $1,666W$ 単位を生産するであろう。ところで、この $1666W$ 単位は、労働供給が $1W$ 単位の賃金率のもとで完全に弾力的でないかぎり、 $1,666$ 労働単位を支配しないであろう。短期では、かなりの失業労働の予備が存在するという状態からはじめないかぎり、このような

仮定は満たされそうにない。たとえば、もし初年度に支配される 1,000 単位の労働が完全雇用の状態を示すなら、そのときには、第2年度における社会的産出高の 1,666 W 単位への増加は、支配される労働量あるいは雇用量を増加させはしないであろう。そしてもし社会的産出高の全部が利用可能な労働供給と交換されると仮定するならば、その増加は、賃金率を 1 W 単位から $\frac{1,666}{1,000} \div 1 \frac{2}{3} W$ 単位へと引き上げる効果をもつだけであろう。かくして我々は、社会的産出高が「支配」しうる労働量によって測定されるその社会的産出高の価値は、その社会的産出高の物的な大きさがどうであろうと、したがってまたそれに対応する主観的所得の大きさがどうであろうと、所与の労働供給（ここでの例では 1,000 単位）によって規定されるという結論に到達することになってしまう。H. Myint, *ibid.*, pp. 21-23. [なお、ミントによれば、この (b) でみたような難点をのがれるためのスミスの方法は、議論を、長期の調整に移すことであったのであり、そしてそれはつぎのようなものであったとされる。すなわち、我々の例(b)においては、スミスは、賃金率が第2年度に $1 \frac{2}{3} W$ 単位へと引き上げられるのであるから、そのことは、人口を刺激するという効果をもつであろう、と言うことであろう。適当な（またどちらかといえば長い）タイム・ラグのうちに、社会的産出高および所得における増加は、人口および「支配される」労働量における増加によって示されるであろう。かくして、社会的所得の変動の趨勢の指標とみなされるべきものは、ある所与の年度における支配される労働の量ではなく、年々に支配される労働の量の趨勢である。社会が年々ますます多くの、あるいは一定の、あるいは減少する労働量を、「支配する」のに応じて、社会の経済的厚生は、増加しているか、一定であるか、あるいは減少しているか、であろう。「どんな国でも、その繁栄の最も決定的な指標はその住民数の増加である」(W. N., p. 70. 大河内訳<I>119ページ。)のである。H. Myint, *ibid.*, p. 23.]

他方、「物的産出高アプローチ」というスミスの考え方についてのミントの所論はつぎのようなものである。それによれば、物的産出高アプローチの観点からの価値尺度に関してスミスが言わなければならなかったことは、「文明国では、その交換価値が労働だけから生じるような商品はほんの少数であって、圧倒的の大部分の交換価値には、主として地代と利潤が寄与している。だから、その国の労働の年々の生産物は、つねに、その生産物を産出し、調製し、市場に運ぶのに用いられた労働よりもはるかに多量の労働を、購買または支配するに足りるのである。もしこの社会が年々に購買できるはずの労働のすべてを年々用いるとすれば、労働の量は年ごとに大きく増大するだろうから、すべてのあとの年の生産物は前の年のそれにくらべて、非常に大きい価値をもつことになるだろう。だが、年々の生産物の全体が勤勉な人々を扶養するために用いられる国などというものはどこにもない。怠け者が

どこでもその大部分を消費するものである。この全生産物がそうした二つの異なる階級の人々のあいだに年々分割される割合が異なるのにおうじて、その通常価値または平均価値は、年々増加するか減少するか、それとも年から年へとひきつづき同じであるか、そのいずれかになるにちがいない。」(W. N., p. 54. 大河内訳< I > 92ページ。)という章句のなかに集中的に示されている。ここでの議論は、また、さきの我々の数字例に立ち帰ることによって説明できる。なおその例では、1,000単位の労働を支配するある所与の年度の社会的産出高は、1,000 W 単位であり、そのうちの 600 W 単位は賃金として支払われ、400 W 単位は地代および利潤として、あるいは地主および資本家の純所得として、残されるのであった。このような状況から出発すれば、典型的なケースと考えられる三つの可能性がある。(i)資本家と地主が、400 W 単位の彼らの全純所得を再投資してそれらを「生産的」労働者に提出することを、決定するかもしれない。この場合には、すでにみたように、次年度における社会的産出高は、収穫一定のもとで計算すれば、約 1,666 W 単位へと、増加するであろう。(ii)資本家と地主が、400 W 単位の彼らの全純所得を消費してそれらを消耗的サービスを行なう「不生産的」労働者に提出することを、決定するかもしれない。この場合には、前年度と同じように 600 単位の「生産的」労働が生産に「体化」されるのであるから、次年度における社会的産出高は 1,000 W 単位で一定に留まるであろう。(iii)資本家と地主が、400 W 単位の彼らの純所得をたんに消費するだけでなく、「彼らの資本に食い込む」ことを、決定するかもしれない。いま、400 W 単位ではなく 600 W 単位が「不生産的」労働者に提出され 400 W 単位だけが「生産的」労働者のためにとっておかれるとしよう。その場合には、収穫一定のもとでは、次年度の社会的産出高は $\frac{1,000 \times 400}{600}$ 、約 666 W 単位へと減少するであろう。ところで、うえてみたスミスの章句に示されているように、スミスは、資本家と地主が彼らの全純所得を「生産的」目的に再投資するということは期待できないと信じていた。それゆえ実際には、その経済システムは、ケース(i)で示される上限には到達しないであろう。他方スミスは、「自分の暮らしの改善をめざしての、人間の様で恒常不変の努力こそは、私人の富裕はもとより公的な国の富裕が根源的につくり出される原理である。この努力は、政府の濫費や行政上の最大の過誤があるにもかかわらず、改善をめざす事物自然の進歩を維持するにたりるほど強力な場合が多い」(W. N., p. 326. 大河内訳< I > 536ページ。)、ということを指摘している。それゆえまたその経済システムは、ケース(iii)で表わされる下限へと没んでしまうことはたぶんなく、ケース(ii)の停滞の状態とケース(i)の上限とのあいだを、変動するであろう。かくしてスミスはつぎのように結論することとなる。すなわち、良き経済政策の基本原理は、経済システムを、最大の経済進歩率の状態を示すケース(i)によって表わされる上限のできるだけ近くにまで引き上げるために、貯蓄を奨励することである、と。H. Myint, *ibid.*, pp. 23-25.

- 17) H. Myint, *ibid.*, p. 25.
- 18) H. Myint, *ibid.*, p. 25.
- 19) H. Myint, *ibid.*, pp. 25-26.

結びに代えて

以上、1940年代に海外において発表された「アダム・スミスの価値尺度論」に関する研究として、A. H. ジェンキンズと H. ミントの所論をみてきた。

以下では、それらの研究の特徴等に関して、若干の点を示しておくこととする。

まず、本稿で取り扱ったジェンキンズの文献それ自体は、その副題が示しているように、スミスが『国富論』において展開している論述を、平易で短縮した形で、しかも現代風の形で、再現しようとするものであるが、ジェンキンズは、そのような形でスミスの議論を示していく過程で、スミスが労働を唯一の正確で普遍的な価値尺度としているととらえつつ、それにたいして、スミスのいう労働をどちらかといえば「生産力」としてとらえ、そして、個人間の労働の生産性の相違、経時的な労働の生産性の可変性ということから、労働、人・時といったものは正確で普遍的な尺度たりえず、また、もともと真に正確で普遍的な尺度といったようなものはたぶん存在しないのだ、ということ指摘している点に、一つの特徴を見出せるであろう。

他方、価値尺度についてのスミスの議論にたいするミントの見方は、どちらかといえば前稿でみた1937年のボウレイの研究のなかにみられる見方、つまり、スミスが不変の価値尺度を追求したのはたんに個々の財貨の価値を測定するものとしての価値尺度それ自体を見出すためであっただけでなく、さらにそれによって、総国富およびその変化を測定するための標準を見出すためであったのだという見方、の延長線上にあるものといえるのであるが、そのさいミントは、スミスの議論を「厚生経済学」の視点からみて、価値尺度についてのスミスの議論を、もっぱら、国民分配分、

社会的産出高，社会の経済的厚生，とくに，それらのありうる変化の，指標についての議論としてとらえ，そしてそのような角度からスミスの所論にたいして立ち入った検討をくわえるのであったのであり，またこのような点に彼の研究の大きな特徴があるといえよう。